

## 研究プロジェクト

## 発達障害の認知・感情特性と療育的関わり

久保(川合)南海子 (こころの未来研究センター助教)  
Namiko Kubo Kawai

## 学習に困難を抱える子ども

現在、学習障害、注意欠陥／多動性障害、高機能自閉症を含む特別な教育的支援を必要とする児童生徒は、約6%の割合で通常の学級に在籍している(文部科学省「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の全国実態調査2002」結果より)。これらの障害をとまなう子どもは、

育コーディネーター」を指名すること等の推進体制が整備されていくのにもない、学習の困難さが障害に起因しているということが広く知られるようになってきた。一方で、実際の子どもの対応方法は、教育現場で努力はされているが、いまだ定まっていないのが現状である。学習が困難な子どもの学習支援にはまだ多くの課題が残されている。

して学習が進むよう、認知的に強い能力によって学習の迂回路を形成させるなど、体系化されたプログラムの供給と長期的展望に立った支援を目的とする。

複数の学習障害児や広汎性発達障害児を対象に、実証的な科学実験をおこなうことによって、彼らの持つ認知に関する共通基盤を観察することができる。このことは、教育の現

果が得られているが、読み書きが苦手な子どもの場合、九九の反応時間が遅くなる傾向がみられた。ほかには、読みが苦手な子どもを対象に、文章中の単語に対する着色が読みの流暢性に与える影響について検討している。日本語では単語間に区切りがないため、単語に着色することにより、意味のあるまとまりを把握しやすくなると考えられる。これらの研究は、現在も実験参加者の子どもを増やしつづ継続中である。

療育研究では、2007年11月から、3歳から9歳まで8名の発達障害の幼児・児童に、こころの未来研究センターへ来ていただき、一人につき週1回1時間の療育をおこなっている。療育では、主に読み書きの苦手さの原因を評価し、トレーニングをおこなっている。発達障害の子どもは認知特性において非常に大きな個人差がある。そこで初期の段階では、WISC-IIIやRCPMなどの知能検査や、読み書きスクリーニング検査などの標準化された検査、そして私たちが独自に作成した検査を用いてアセスメントをおこない、個人の認知的スキルのプロフィール作成をした。それに基づいて、読み書きのトレーニングとして、パソコンを使用した単語・文章のひらがな入力課題をおこなっている。

そのトレーニングでの効果はいく

つかの課題で縦断的に評価している。すると、キー入力が上達するのはいうまでもないが、他に記憶能力も高まっていることがわかった。2語文の記憶はできて5語文になるとできなかったという子どもが、このトレーニング後には5語文でも覚えれるようになった。それから、ある文章を目で見て読んだときには内容がよく理解できて、耳で聞いた場合にはわかっていなかった子どもが、トレーニング後には耳で聞いただけでも内容がよく理解できるようになった。そして、作文にも変化があった。自発的には短い文章しか書けなかった子どもが、トレーニング後にはさまざまな話題を含んだ長い文章を書けるようになったのである。

このパソコンを使用した単語・文章の入力課題が何をトレーニングしているのかというと、見本の文章を正確に読んで正確に打つという正確さの訓練と、どれだけ早くできるかという流暢性の訓練である。それらは単に、文字を入力する能力を高めるばかりでなく、記憶力や理解力、そして自分で文章を作り出す能力をも高める訓練になっている。私たちは、単純な作業の積み重ねによって、その子どもの成長に沿って段階を追って訓練することが、その子どもの持っている能力を底上げするような形で、無理なく伸ばしていける

のだと考えている。

子どもが課題に慣れた後には、療育の時間内だけでなく家庭でのトレーニングも開始している。トレーニング課題のプログラムを家庭のパソコンに導入し、結果をそのつどメールで送ってもらうことによりeラーニング的な手法の検討もおこなっている。

## 今後の展望

このプロジェクトが京都新聞などで紹介されたこともあり、現在、療育に参加したいという問い合わせが京都市内を中心に数多く寄せられているので、今後は対応できる範囲で対象児童を増やしていく予定である。また、心理療法の視点から二次障害を抱えている家族への支援や、療育が子どもの感情的な側面にどのような変化をもたらしているのかについても検討していきたいと考えている。

最後に、この療育研究が継続できているのは、参加している子ども自身が頑張っていることもさることながら、常に真摯な姿勢で対応している現場の療育担当者、ていねいな補助をしている学生ボランティアさんたち、そして子どもさんのご家族の手厚いサポートがあるからにはほかならない。ここに記して感謝いたします。

著作権者・所蔵者の権利の保護のため  
画像は掲載できませんパソコンによる療育の様子  
左は単語入力課題、  
右は文章入力課題

情緒面をはじめ、一見これといって特別な障害があるようには見えない。そのため、単に勉強の苦手な子どもとみなされがちである。少なくとも、このような子どもたちの特徴が明確になる近年までは、特に区別されることなく健常な子どもたちを対象としたカリキュラムによる教育がなされてきた。

しかし、2004年に「小・中学校におけるLD(学習障害)、ADHD(注意欠陥／多動性障害)、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン(試案)」が公表された頃から、LDをもつ子どもたちへのサポートが必要であるとの意識が高まってきている。すべての小・中学校において「特別支援教

## 基礎的な研究と現場での療育

本研究プロジェクトは、学習障害児や発達障害児の認知的特性を実験的に研究する基礎研究と、研究のフィードバックを含めた実際の療育研究から成り立っている。基礎研究では、それぞれの子どもの直面している障害に応じて、もっとも適切かつ体系的な療育支援を考えていくために、学習の困難さをもたらす認知機能と脳機構の関連について解明することを目的とする。実際の療育研究では、まず、さまざまな認知課題を用いてそれぞれの子どもの得意な部分、逆に苦手な部分を同定する。そして、得意な部分についてはさらに伸ばし、困難な部分は安定

場において、個人の特性を考慮しながらユニバーサルな授業運営等を可能にすることにつながっていくだろう。また、それぞれの子どもの応じた療育をおこなうことは、一人でも多くの子どもの未来における学習可能性を伸ばすという効果が期待できる。

## プロジェクトの経過と成果

基礎研究の一例では、読み書きの苦手さが算数教育にどう影響するかを検討するため、ひと桁の足し算と掛け算九九の反応時間を調べる実験をおこなった。成人を対象にしたこれまでの研究では、言語的な暗唱で解答可能な九九は足し算よりも反応時間が早く解答可能であるという結



療育をおこなっている大学院生と学生ボランティアの皆さん

研究プロジェクト

# 共感的対話の相互作用性

## ——カウンセリング対話から「対話のなぞ」に迫る

吉川左紀子 (こころの未来研究センター長)  
Sakiko Yoshikawa

人は、カウンセラーと対話することで、自分の抱えている悩みを乗り越えることができたり、かかえる問題に対する新しい解決法を思いついたり、悩み自体を客観的にとらえられるようになったりする。こうした、話し手のこころに変化をもたらす対話、こころの成長を促す対話とはどのようなものなのだろうか。それは日常生活の中での家族や友人同士の会話とはどのように異なるのだろうか。私が以前からとても不思議に思い、いつか答えを見つけたいと思っていたのが、この聞き手のプロであるカウンセラーの、対話の技法である。

「共感的対話の相互作用性」プロジェクトは、心理臨床のカウンセリング対話に焦点をあて、対話のなぞに迫ることを目指して研究を進めている。参加している研究者は、自身が熟練カウンセラーである臨床心理学者（桑原知子、大山泰宏）、職場など社会的場面で生じる感情の行き違いや対人ストレスへの対処に関心をもつ社会心理学者（渡部幹）、対話する人の身体の動きや音声の解析に習熟した認知心理学者（長岡千賀、小森政嗣）と、学生時代に臨床心理学を志し、あえなく挫折したものの臨床対話には常々関心を持ち続けてきた認知心理学者（吉川左紀子）である。学際的なグループなので、それぞれの専門分野から見た関心を取り入れながら、対話中の「音声」「身体の動き」「言語テキスト」などの分析可能な手がかりを使って研究を進めている。

カウンセリングの対話で重要なのが、「聴くこと」であるとよく言われる。そうした、専門家としての訓練を経て初めて可能になる聞き方の特徴を、できるだけ客観的に検証し、カウンセリングの場で起こっていることを「目に見える形」で取り出してみる、ということがこの研究プロジェクトの最初の目標とした。そしてさらに、聴くという行為が、話し手の思考プロセスや感情をどのように変えるのか、さらに聞き手はそれをどのように認識するのか、対話が終わった後の、対話に対する相互の認識はどのようなものか、など、少しずつ対話分析を進め、「対話のなぞ」に迫っていこう、というのがこの研究プロジェクトのねらいである。

### 話し手、聞き手が使う時間

私たちがまずめざしたのは、聞き手がカウンセリングの専門家の場合と、専門家でない人の場合に、話し手（クライアント）との対話にはどんな違いがあるかを具体的に明らかにすることである。そのために、専門家として本職のカウンセラー、非専門家として高校の先生に協力してもらい、心理臨床の模擬カウンセリング場面（非専門家の場合は悩み事相談の場面）を収録して分析した。図1の写真は、収録した模擬カウンセリングの様子である。左がカウンセラー、右は相談者で、椅子やテーブ

ルの位置、距離なども実際のカウンセリングにできるだけ近いセッティングになるよう配慮した。通常、カウンセリングは50分間が1セッションである。50分の時間の中で起こる対話を、50分の時間の流れの中で分析する、という方針のもとで、セッションを収録し、そのときの話し手（相談者）と聞き手（カウンセラー、高校の先生）の発話の逐語録と音声パターン、映像の解析を行った。すると、聞き手の専門家であるカウンセラーの対話に、いくつかのユニークな特徴が明らかになってきた。

専門家としての聞き手の特徴がはっきり表れているのは、話し手と聞き手が発話する時間と、沈黙の時間に着目した分析である。具体例をみてみよう。図2にはふたりの対話の音声波形が示してある。線がギザギザに上下している部分は、発話している音声波形を表している。それ以外の部分は沈黙の時間である。沈黙の時間には2種類あって、話者が交替するときに生じる沈黙は「反応



図1 演習中の対話ロールプレイ

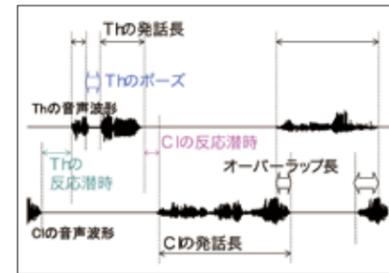


図2 発話音声データの分析方法 (話し手はCl、聞き手はThと表記)

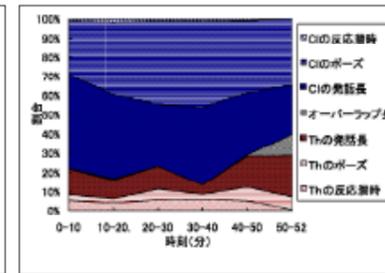


図3 聞き手が専門家ときの発話と沈黙の変化パターン

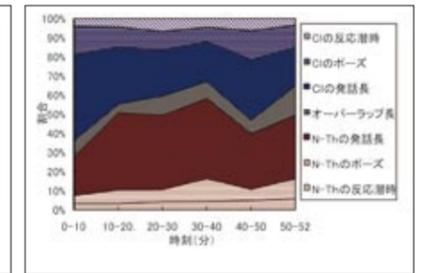


図4 聞き手が非専門家ときの発話と沈黙の変化パターン

潜時」、話の途中で入る沈黙は「ポーズ」である。話し手と聞き手の「発話」と「沈黙」の長さを調べて、対話中の50分間の中で、それぞれの対話中の時間が話し手と聞き手にどのように使われているかを調べてみると、図3（専門家）と図4（非専門家）のようになった。図3は聞き手が専門家のカウンセラー、図4は聞き手が非専門家の高校の先生の場合、横軸は、対話の開始から終了までの時間（分単位）である。

ふたつの図を見比べてまず目につくのは、図3の青の領域、つまり話し手が使っている時間が、図4に比べて圧倒的に多いということである。さらに、青の領域、とくにポーズの時間は、対話の開始から20～30分間に少しずつ広がっている。このことは、話し手の発話中の沈黙の時間が次第に長くなっていることを示している。一方、非専門家が聞き手となっている場合には聞き手の発話時間がとても長いこと、つまり、本来聞き手であるはずが、逆に話し手よりも長い時間、発話していることが見てとれる。とくに、50分の対話の前半部分で、次第に話す時間が長くなっている。「聞き手」としてのカウンセラーの対話の特徴は、自ら積極的に語ることをせず、相談者の話をひたすら傾聴する態度にあることが推察される。話し手の対話中の沈黙は、数秒から10秒を超える場合もあるが、そうした沈黙の時間は、話し手の思考を深めるうえで重要な「間」である。

発話内容も、非専門家の場合には、相談者の発話のあとで「〇〇をしてみたらどうか」といったアドバイスをしたり説得を試みるような積極的な応答が多いが、専門家の応答には、そうした発話は少なく、相談者の発話に対する聞き返しや確認などが多いのである。専門家の「聴くことに徹する」という姿勢は、発話時間と沈黙時間の計測結果にも明瞭にあらわれているのが、印象深い結果であった。

### からだの動きが同調すること

話し手と聞き手の発話時間と沈黙時間の分析のほか、身体の動きの同調性に着目した分析も行っている。「同調性」というのは、2者の身体の動きがリズムカルに同期する現象である。こうした、言語以外の手がかりを分析して、対話の質や対話している2者の関係を表すことも、当事者自身が気づいていない心の動きを目に見える形にするうえで重要な手法である。

対話が「全体としてよい感じで進んだ」と評価された映像と「対話が表層的で深まらない」と評価された映像を素材にして、2者それぞれの、身体の動きの大きさの時間変化を解析した。すると、高評価の対話例では、話し手と聞き手の身体動作に、対話中一貫した同調が生じており、話し手の動作から約0.5秒遅れて、聞き手の動作が生じていることが分かってきた。一方、低評価だった対話例や、非専門家が聞き手となった

対話例では、二人の身体の動きに一貫した関係はみられなかった。「対話がよい感じで進んだ」ときに、安定して身体の同調が生じていること、また、その同調は、「話し手の動きに聞き手が応える」という性質を表すことは、対話のなぞを考えると重要な手がかりになるような気がしている。

### プロジェクトの「おまけ」

本プロジェクトを進めるうえで、参加メンバーが集まって定期的な研究会を開いている。臨床心理学、社会心理学、認知心理学という、もともと関心事や研究の方法論がかなり異なる研究者が集まり、「心理臨床の対話」というひとつのテーマをめぐって話し合っていると、「そもそも心理臨床家にとっての、専門性とは何?」「対話中の沈黙の時間のもつ意味は何だろうか?」「異なった臨床理論に基づくカウンセリング対話を比較したらどうだろうか? 違いだけでなく共通項も見えてくるのでは?」といったさまざまな疑問が湧いてきて、議論が尽きない。違う方向から問題を眺めて議論する新鮮さ、異なる経験を積んできた人とじっくり話すことの味わい深さ、目に見えない「こころ」を目に見えるもの（図や表やテキスト）にして話し合う楽しさ。このプロジェクトから私たちが得ることができた、こうした「おまけ」は、研究者自身のこころを豊かにする、予想外の成果と言えるかもしれない。

## 研究プロジェクト

こころ観の思想的・比較文化論的  
基礎研究鎌田東二 (こころの未来研究センター教授)  
Toji Kamata

## 1 「こころ観研究会」のねらい

本研究プロジェクトは、〈人類が「こころ」をどのようにとらえてきたかを、宗教・哲学・芸術・思想などの側面からまず思想的に考察し、それをベースに比較文化論的な考察を加えてゆく〉という研究課題を掲げて、2008年4月にスタートし、2008年度は、4回の研究会と1回の意見交換会を行った。

本研究プロジェクト、通称「こころ観研究会」は、「こころ」をめぐるどのようなアプローチや考え方があるかを“総めぐり(総覧)”する研究会であり、自由な議論と研究者相互の交流の場を生み出すこころ研究の総合サロンである。さまざまな研究者が自由に各個の研究手法や研究成果を披露し、活発な議論をたたかわせて、各自の拠って立つ学問的基盤や方法や最新研究成果を吟味し、掘り下げ、文系・理系もろもろ混在した参加者と共に、こころ研究の共通概念や共有基盤を探り、確認し、各自の、また各分野のこころ研究を活性化させる。あえて、本研究プロジェクトを「こころ観の思想的・比較文化論的基礎研究」と名付けたのも、そうした意図からである。

## 2 こころ研究の時間軸と空間軸

さてその際、時間軸に沿ったこころ研究と空間軸に沿ったこころ研究を二本の柱とする。つまり、生物進化論および思想的な研究と、比較文化論および民族学(文化人類学)・民俗学的・社会的な研究である。

そこで、霊長類の行動形態からヒトへの「こころ」の進化過程を経て、ヒトが諸時代・諸地域においてみずからの持つ「こころ」をどうとらえてきたかを総覧する。

たとえば試みに、日本人の「こころ」および「こころ観」がどのような変化の過程を辿ってきたかを時間軸に沿って輪切りにしてみるとどうなるだろうか。日本列島に生きた人びとがどのような「こころ」を持ち、どのように「こころ」についての思想を発達させたか。『こころの未来』創刊号での山折哲雄氏を囲む吉川左紀子センター長とカール・ベッカー教授とわたしとの座談会「こころと日本文化」(28~43頁)の冒頭に、「『心』の日本思想史」という節を掲げたが、そうしたテーマの掲げ方もこころ観の通史的研究の一方法であろう。縄文遺跡から見る日本列島人のこころ、弥生遺跡・古墳からみる古代人のこころ、日本神話や神道からみる古代日本人のこころ観、仏教から見るこころ観、儒教から見るこころ観、空海と最澄のこころ観、中世・近世・近代日本のこころ観、ニューエイジ・新宗教のこころ観、現代文学・映画に見るこころ観など、さまざまな時代・思想家・芸術家のこころやこころ観を探ることができる。もちろんそれらの限定的な研究からどこまで包括的なその時代や思想家特有のこころやこころ観を抽出することができるか未知数のところはあるが、しかしそうした研究に着手していく意味も意義も大いにあるだろうし、それは「豊かなこころ」

のありようを探るこころの未来研究センターの重要な課題の1つであろう。

## 3 「心理学栄えて、こころ貧し」を超えて

一昔前、「民俗学栄えて、民俗減ぶ」とか、「文化人類学栄えて、文化減ぶ」とか言われたが、「心理学栄えて、こころ貧し」という状況が1990年代から続いているように思う。かつて、日本民俗学の創始者柳田國男は「民俗学は日本人の自己内省の学であり、幸福実現の学である」と主張した。だが、そうした柳田の提唱から80年余、民俗学は自己内省の力も幸福実現の力も失っている。いや、民俗学がいまだ十分にそうした力になったことはなかったともいえる。柳田が掲げた民俗学の高い目的はスポイルされ続けてきたのである。

1990年代からの臨床心理学の隆昌は、けっして豊かな「こころ」の育成に寄与したわけではないし、むしろこころの貧困と困難の裏返しでもあり、反映でもあったともいえよう。こころに関する研究や学問はますます分断化され、個別研究の量は豊富になったが、しかし、それを研究する研究者の「こころ」も彼らを取り巻く周囲の「こころ」もいよいよ深刻な不透明さを増し、各自の支えになるような「こころ」観が生まれてきているわけではない。「こころ」について、まだまだ基礎研究も応用・臨床研究も足りず、理論と実践・実態の乖離も進んでいるように見える。また、それぞれの学問分野

内や学問分野間の相互の対話・対決・徹底討議も足りない。そうした自在な総合討議がさまざまな角度から繰り返されつつ、「こころ」をとらえる包括的な枠組みや共通の道具づくり・土俵づくりをする必要があるだろう。わたしたちは、そのような新しい総合的な「こころ学」の探究と構築の砦として「こころ観研究会」を立ち上げたのである。そこでは、個別研究間、研究者間を「つなぐ(連結する)」ことを重視する。

## 4 2008年度の「こころ観研究会」の活動

その第1回目の研究会が、2008年6月5日、芝蘭会館研修室で行われ、理化学研究所脳科学総合研究センターのプロジェクトリーダーの脳科学者・入来篤史氏が「サルからヒトのこころへ〜知性進化と神経生物学」、若き縄文考古学者の石井匠氏が「縄文時代のこころ観〜土器の分析から」、本センター教授の臨床心理学者の河合俊雄氏が「もの・内面・接点〜心理療法における心観を求めて」について、それぞれの研究分野から問題提起した。60名余の参加者があり、活発な議論が行われた。この時の発表者の立論は、わたしが研究代表をしている科研『モノ学・感覚価値研究』第3号(2009年3月発行)に掲載されているので、参照していただきたい。

続いて、2008年7月1日に、京都大学吉田泉殿で、第1回「こころ観」研究意見交換会が開かれ、〈そもそも「こころ」とは何か? 「こ

ころ」はどこにあるのか? 「こころ」とは間にあるもので、mindとは違うのではないか。二者間に起こる目に見えないものが大切である。「超越」するこころとは!? 認知考古学など、「取り扱い危険」とされてきた「こころ」が、さまざまな学問分野で注目されだしている。なぜヒトは嫉妬できるのか? 神経科学では、「こころ」は脳の属性だと考えられてきた。「こころ」の存在を、あえて考えないアプローチもある。なぜ、「こころ」がないと困るの? 「こころ」がないなんて考えられない! 苦しい時に何が「こころ」の支えになるのか? 「こころ」もDNAの自己複製という性質の産物だと考える。「こころ」の理解は、知識を積み上げるといふより、しみじみと身体にしみとおってゆくようなものでは? 「こころ」も近代の産物? 「こころ」をなぜ考えるのか? 「こころ」はどうやったら捉えられるのか? などなど、さまざまな問題提起やディスカッションが行われた(以上は大石高典特定研究員による意見交換会のまとめに基づく)。

さらに、第2回研究会(2008年12月18日)は近代思想史研究者(人間・環境学博士)の上本雄一郎氏による「移ろいゆく〈こころ〉——出口王仁三郎『霊界物語』と笑いの形而上

学」、人間・環境学研究科教授のドイツ文学者高橋義人氏による「フマニズムの死の時代における人間のこころと暴力」、第3回研究会(2009年1月22日)は理化学研究所脳科学総合研究センタープロジェクトリーダーの精神科医加藤忠史氏による「躁うつ病研究から見た精神医学の歴史と未来」、第4回研究会(2009年2月18日)は理学研究科教授の霊長類学者山極寿一氏の「霊長類の行動からこころの進化を読み解く」が発表され、活発な議論がたたかわされた。

ともあれ、本研究会はこの混迷せる時代に、「こころ」の羅針盤を探る、「こころ研究・こころ学」の“梁山泊”として、学内外の二十数名の海千山千のつわものたちとともに、自由闊達な探究を始めたのである。(連携研究員・共同研究員については、こころの未来研究センターのホームページをご覧ください。)



第1回こころ観研究会の発表者入来篤史氏



石井匠氏の報告を聞く参加者



意見を述べる連携研究員の山極寿一教授(左端)

## 研究プロジェクト

## Webによるこころの研究ニュースの発信

平石 界 (こころの未来研究センター助教)  
Kai Hiraishi

## プロジェクトの目的

浪人生のころ、高校の同級生が大学で心理学を専攻していると人伝に聞いた。「真面目そうに見えたけど、けっこう怪しいことに興味がある人だったんだなあ」という感想をもったことをよく覚えている。そのわずか2年後、自分自身が心理学を専攻するようになると、初対面の人から繰り返し同じ質問をされるようになる。「心理学を勉強してるなら、今、私がなにを考えているか当てられる？」

このように心理学というと、人の心を読むための何か魔法のような方法を研究している学問というイメージが、世間に根深く存在するように思える。しかし実際の心理学には、理系的な側面、実証科学としての側面が強く存在する\*1。そうした実証的な心理学から、私たちの「こころ」について、常識をひっくり返すような研究や、思いもなかったこころの不思議な働きを明らかにした研究が多く発表されている。これらの研究が心理学の専門家にしか知られていないことは、世間の偏ったイメージを修正する機会を持ち得な

いという意味で心理学にとっても損失であり、そしてせっかくの知識が共有されてないという意味で、社会にとっても損失であるだろう。

しかし心理学の成果を、専門家以外の人々に伝えようとする、あるジレンマが生じる。心理学の知識を、おもしろおかしく伝えたいという気持ちと、研究を過大評価せずなるべく厳密に伝えたいという気持ちのジレンマである。こうしたジレンマを自覚した上で、自分たちが専門家として楽しんでいる「心理学」という学問の魅力と限界を発信するのが、本プロジェクトの狙いである。

## ターゲットと手段

より具体的には以下の目標を設定した。まず「誰に伝えるのか」とい

う点については、高校生から大学1～2年次の学生をターゲットとした。「こころの未来」を「心理学の未来」と読み替えたときに、これから社会に出ていく学生たちに、心理学の魅力と限界を伝えることの意味は大きいと考えたからである。社会的動物である人間にとって、「こころ」についての理解を深めることは、有益であるだろう。

「何を伝えるのか」という点については、心理学の新しい研究論文の紹介を基本におくこととした。現在進行形の科学の現場では、新たな理論や研究結果が本当に正しいかどうかは、すぐには分からない。そうした科学研究の緊張感、言い換えれば個別の研究報告の限界を伝えるためには、まだ必ずしも確立していない、



「こころ学」ブログ

しかし魅力的な研究を紹介する研究ニュースという形が適当と考えた。

そして「どのように伝えるのか」という点については、Webサイトにおけるブログ形式という形をとることとした。速報性を持ちつつ、プロジェクトメンバー同士がコメントを寄せ合うことで、1つの記事からさらに議論を深めることができるのではないかと考えたからである。

覚えやすく直感的に内容が伝わるようにとの思いを込めてブログには「こころ学」というタイトルをつけた。試験的に書いた記事をベースにプロジェクトメンバーで議論をし、ブログの方向性についての意見をまとめた。また試験記事をもとに、こころの未来研究センターのWebサイトをデザインしている山本真也さんにブログのタイトルロゴなどのデザインをお願いし、2008年11月にブログが正式スタートした。

## 記事の紹介

「こころ学」ブログの最初の記事「サunkコストの誤り：だってもったいないじゃないの心理」から一部を抜粋して紹介する。

雨の中出かけて、やっと借りられた話題のDVD。なのに面白くない。見始めて5分で確信。最後まで見ても絶対つまらない。でも、払ったお金がもったいないから……最後まで見ました。

こんな経験、したことありませんか？

つまないと分かっているDVDをみてしまうようなことを「サunkコストの誤り」(Sunk Cost Fallacy)といいます。そう、これは「誤り」なのです。でもなんでこれが誤りなのでしょう？

サunk (Sunk) は直訳すれば「沈

んでしまった」といった意味。だからサunkコストは、沈んでしまったコスト=もう取り返しがつかないコストということです。なぜつまらないDVDを見続けることが「取り返しのつかないコスト」の「誤り」になるのでしょうか。

ちょっと違うバージョンを考えてみて下さい。

テレビをみていたら、面白そうな映画がはじまったので見てみた。でも5分も見たらつまんなそう。さて、この映画を最後まで見るでしょうか？

そんな映画より、さっさとチャンネルをかえてしまいますよね。

そりゃそうだ。雨の中わざわざ借りてきたDVDだからもったいないじゃないか。タダで見られるテレビの映画とは違うよ。そう思いませんでしたか？ それこそが「サunkコストの誤り」なのです。

なぜ？

つまらないDVDを見続けたとして、レンタルDVDショップまでの往復にかかった時間は返ってきますか？ 車のはねた水で汚れてしまった服はきれいになりますか？ レンタルショップに払った

お金は返ってきますか？ 返ってこないですね。だから取り返しのつかないコスト、サunkコストなのです。

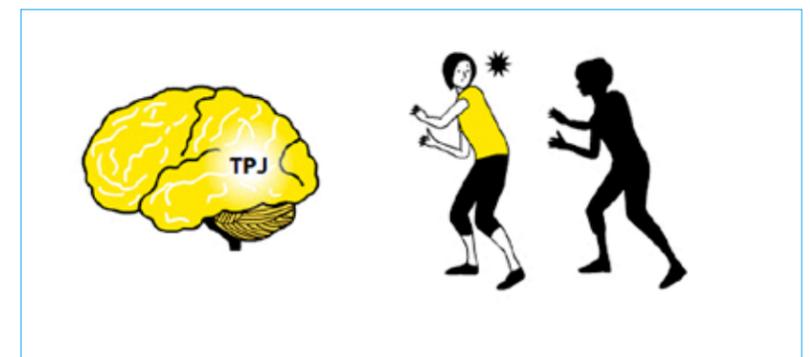
でもどうでしょう。もう取り返しのつかないコストにこだわるよりも、今からの2時間を楽しむことの方が、ずっと大事ではありませんか？

続きは、ブログをご覧いただければ幸いです (http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/kokorogaku/)。

## 今後の予定

最新の研究論文の紹介をするだけでなく、論文へのアクセス方法や研究室・研究者紹介といった、心理学を学ぶための手段についても紹介したいと考えている。ともあれ、まずはコンスタントに記事をアップすることが当面の目標である。ある程度の記事が集まったところで、今後は京都市近縁の高校などに、積極的にブログの存在を宣伝していきたいと考えている。

注1：ここで述べたような大量のデータに基づく心理学の他に、質的な心理学(臨床心理学はその代表かもしれない)も存在し、その重要性も無視することはできない。そして質的な心理学においても、その方法論をよく理解した上でなければ、その意味するところを正確に理解できないという点では、実証主義的な心理学と何ら異なることはないだろう。



「こころ学」ブログのイラスト「人間椅子：神経科学版」の記事より